



地域日本語支援ニュース こだま 第 309 号

2016.12.8



★—メールマガジンをお読みいただき、ありがとうございます—★

【地域日本語支援ニュース こだま】は、日本語教育に関する事業を全国で行っている公益社団法人国際日本語普及協会(AJALT)発行のメールマガジンです。各地域で在住外国人に対する日本語・生活支援に携わっている方々に役立つ情報の共有を目指していきます。

====目次=====

1■中級学習者の話す力を伸ばすために

公益社団法人国際日本語普及協会 津田訓江

2■高校進学進路ガイダンス情報 (12 月)

=====

1■中級学習者の話す力を伸ばすために

公益社団法人 国際日本語普及協会
津田 訓江

「初級のテキスト学習は一応終えたが、その先の会話学習をどのように進めればよいのか迷っている」という日本語ボランティア教室からの声をよく聞きます。学習現場の人数や形態はさまざまかと思しますので、ここでは1対1でいわゆる中級段階に入ろうとしている、あるいは入った学習者に対応する会話学習に絞って考えてみます。

◆まず、学習者と共に目標を持つ

学習者自身が日頃どんな点に不便を覚え、何を指したいかを尋ね、共に納得する目標を作ることが大切です。今後の話題選びにも、新たなテキストを選ぶことになった場合にも、貴重な情報となります。さらに、その目標のための小さな(短期)目標を立てるとより効果的と言えます。中級段階になると上達曲線が鈍化し、達成感を覚えにくくなりがちですから、ここまでやった・できたというステップを設定していくことは、小さな達成感を生んでいくでしょう。

◆中級話者の特徴を理解し、活動に結び付けていく

中級の特徴として、自分から文を組み立てて発信する力が備わるという点があります。初級段階では、とにかく学習者は質問されたことに短い文か単語のみで答える会話で終わりがちだったこの「受身のリズムを断ち切る」ことを考えましょう。

(1) 会話のリズムをせかさず待つ

学習者がすぐに応答できなくても、少し呼吸を置いて待つことです。相手が返答につまると、つい助け船を出してしまうのが人情です。そこをほんの少しこちらが勇気を持って待つという我慢をします。あるいは、学習者がこちらの質問にいつものように短い文で正しく答えたとしても、矢継ぎ早に次の質問を発ししないで、一呼吸待ってみるのです。すると、学習者の方から何かしら追加の発話が自発的に飛び出してくるようになります。私達の感覚では長〜く感じられるその沈黙（間＝ま）ですが、学習者にとっては、聞かれたことに何と答えようかと全脳を働かせて必死の努力をしている「間」と言えるかもしれないのです。

例えば、

支援者「Aさん、趣味は何ですか。」

Aさん「テニスです。」

支援者「……」（←もっと聞きたいという表情、頷きなどで少し待ってみる）

Aさん「でも、日本に来てからとっても忙しいです。全然できません。残念ですねえ。」

ここで、つい「……」なしに、すぐ「そうですか。テニスはいつから始めたんですか」などと、聞きたくなるかもしれませんが、学習者のペースを作り、主導権をあずけてみると、予想外の新鮮な会話展開が期待できます。学習者の「～残念ですねえ」を受けて、「そうなんですか。でも、どうしてそんなに忙しいんですか」と聞けば、例えば、日本に来てからの忙しい日常について、いろいろ話が進むかもしれません。それまで気付かなかった学習者の新しい一面を発見することもあるでしょう。この段階の学習者は、不慣れですが、実は、自立的な発話力が芽吹いています。こうした絶好の機会を逃す手はありません。

(2) 良い聞き手に

学習者の発話に興味を示す良い聞き手となることで、一層の発話が引き出せます。「へええ、そうですか」「それで？」「えっ、本当ですか」「でも、なぜ？」などの相槌や問い掛けは、学習者にもっと話そうという気を起こさせ、さらに

は、文と文の関係性への意識を促していくことにつながります。

質問も簡単に「はい／いいえ」で済んだり、単に比較するだけに終わらないように、「どうして～?」「どうやって～?」と理由や方法・手順を尋ねたり、「どんなところが大変ですか」と説明する機会を作ったりします。これは、中級段階でしっかり押さえておきたい理由を述べる力や、事柄を順序よく話す力、様子を描写・説明する力を上げていく練習になります。

分かりにくい発音や曖昧な表現(一般の日本人には分かりにくいと思われる)で答えたら、物分かりよく勘で理解してしまったり、すぐ正しく言い直してあげたりするのでなく、「すみません。もう一度お願いします」「A? B?」などと、何が分かりにくいかに気付いてもらいます。例えば、学習者が「雨漏りの修繕」と言えなければ、「その仕事はどこでしますか」「そこで何か作るんですか」等々、興味深く、知ろうとする態度で問いかけます。すると、学習者は知っているありったけの表現を駆使して説明しようとしします。そうして、伝え切った暁には両者とも、一瞬ですが、充実した達成感に浸れること請け合いです。

(3) 一人語りを仕向け、学習を意識化させる

こうしたやり取りの後で、「今の話をはじめからもう一度してもらってもいいですか」等と促すと、学習者の一人語りの機会が作れます。詰まった時はほんの少し手助けをもらいながらも、一気に自分でストーリーを言い終えた後の学習者の達成感是一段と大きいはずです。

「楽しくたくさん話せたけど、勉強もしたい」、時に学習者はいくらたっぷり話せてもこんな声をあげるかもしれません。きちんとテキスト的に学習内容が明示されない勉強した気になれないタイプの学習者はとくにそうでしょう。それには、覚えてほしい、直してほしいという語彙や表現があった場合、できればその場で、無理なら次の学習機会にでも、簡単なメモを作って渡すと学習の意識化が期待できます。それも、できれば、あれもこれも示すのではなく、できる限りワンポイント的に絞って示した方が効果が上がるようです。もし、学習者が自分でメモを取るタイプなら、勘違いのメモがないか、ちょっとチェックしてあげることも必要でしょう。

(4) 支援者の質問力トレーニング

いつ、どんなタイミングで、どんな質問を投げかけるか、日頃から自問自答の想定問答トレーニングをするというのも一つの手です。もし複数のメンバーで行えば、さらに効果があるでしょう。

例えば、「私は朝ごはんにはヨーグルトを食べますが、Aさんはどうですか」と

いう簡単な質問からスタートして、A→私→A→私と流れを想像しながら考えていきます。一つの質問に何種類もの答えが想定できますから、枝葉はどんどん広がっていくことでしょう。こうしてさまざまなケースで、どのような答えや質問が飛び出すかの発想トレーニングをしていると、現実の学習者との会話の中で、学習者の自立的発話にどんな質問が適しているかが出てきやすくなります。

以上のほかにも、現場では多くのさまざまな悩みが起きてくることでしょう。この記事が少しでも皆様のお役に立つことを祈りつつ筆をおきます。
